

「私の第一声⑭」

【中学校の先生になってすぐ、人権教育と出会った！】

平成6年4月、24歳で国語の教員になった私は、初任者として中学校に赴任します。2年生の担任となることがわかり、生徒を迎える準備をします。緊張でドキドキしている始業式の前日の夕方、先輩の先生に連れられ、地域の集会所に行きました。説明は受けていたのですが、当時、あまりよくわからないまま、そこで行われている取組みを見学していました。

私とほとんど年齢の変わらない青年が、集まった中学生を前に、話をしています。生徒たちは真剣なまなざしで、青年の話聞いています。青年は、自分の人生について語り、生徒達への願いを口頭の言葉のみで伝えています。静かな語り口であるにも関わらず、その熱い思いは、ほとぼしるように溢れ、伝わってきます。

後から考えれば、この場面が、私の人権教育との出会いでした。

青年は、地元の子どもたちに、中学校生活で頑張ってもらいたいことを伝えていたのです。これは、現在本校でも実施している「第一声」の取組みの準備の1つでした。「第一声」とは、人と人が出会った時の最初に発する声（言葉）を大切に作る取組みです。自分の話す内容を丁寧に準備し、人の話す内容を真剣に受け取ります。自己紹介なのですが、自分がどのように生きていきたいのかを宣言する、決意表明という面が強いのです。

入学式や始業式など学年のスタート時に、まず教職員が、自分の「第一声」を語ります。自己紹介の中で自分の生き立ちを語り、どんなクラスにしたいかという思いを、自分の経験や過去の卒業生の姿を通して語ります。それを受けて、生徒が自分の「第一声」を語るのです。

青年が中学生に語っていたことの概要は、「世の中には残念ながら『差別』という許せないものがあり、自分も『くちおしい』経験をしたことがある。差別でそんな思いをする人をなくしたい。いじめも差別であり、差別をなくすためには、まず、いじめをなくさなくてはならない。絶対いじめをしない、許さないと決意してほしい。新しい学年が始まる時に、そんな思いを、クラスみんなで共有するために、

『第一声』をがんばってほしい」というものだったと思います。

まず驚いたのが、学校の取組みを、保護者や地域の方が、応援し、協力してくれているということです。今では当たり前のことだと分かっています。三中校区でも、地域の方の協力なくしては何もできないほどお世話になっていますが、当時の私は、学校の取組みは、教職員のみでするものだと思っていたのです。

もう1つ驚いたのが、青年の話の奥深さでした。私は、たくさん本を読んできて、哲学にも興味を持ち、「人が生きる」ということについて、自分なりにいろいろと考えるようになっていました。自分のいじめられた経験も、その中で見つめることができるようになりました。ですから当時の世間知らずの私は、物事を深く考えている点で同じ世代にはでは負けることはない、勘違いしていたのです。

青年の話は、私には、理解できない奥深さがありました。中学生に語っているのですから、難しい言葉を使っているわけではありません。言葉の意味としては、すべて理解できます。しかし、自分の経験した事実を、私なら恥ずかしくて言えないだろうと思うことも含めて、気負うことなく自然に語っている姿を見て、中学生のために、なぜそこまでできるのか、全くわかりませんでした。

自分と同世代の人間が、「人が生きる」とはどういうことなのか、自分の生き方で示しているのを見て、私自身の認識や覚悟がまだまだ浅く足りないと感じ、背中に冷や汗をかいたことを今でも覚えています。

その日、学校に帰った私は、すでに用意していた自分の「第一声」の文章を捨て、もう一度初めから作りなおしました。当時は書院というワードプロセッサを使っていましたが、明け方にインクリボンがなくなって、焦ったことを覚えています。

そうした苦勞をして、初めての「第一声」に取組みましたが、付け焼刃では、なかなかうまくはいきません。自分なりに手ごたえを感じられるようになるまでには、何年もかかりました。

【不定期コラムNo.27】へつづく

第三中学校ホームページ

では、子どもたちの様子やお知らせなど情報発信しています。ぜひご覧ください。これまでの不定期コラムも「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

<http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/>

貝塚第三中学校HP



貝塚第三中学校HP